



序 文

阿波学会会長 小林 勝 美

平成16年度は「災」で表現され、まさに自然災害が国の内外で猛威を振るい、人間の生活基盤をも奪い去る惨状を見せつけた。

台風10号が徳島県に上陸、県南地方は局地的な集中豪雨に襲われ、木沢村は山腹の崩壊が相次ぎ、交通路も遮断され孤立状態となった。結果、平成16年8月5日の阿波学会総合学術調査結団式は中止、開催の目途は立たない状況となった。しかし、復旧工事が順調に進み、2ヵ月後の10月8日には木沢村公民館で多数の村民の参加のもと、結団式が開催された。

10月8日も台風接近ということで、朝から小雨が降っていた。午前中に結団式は終わり、午後は曇り空、各学会員は現地へと調査を開始した。私も考古班の板碑調査で現地へと足を踏み入れた。黒滝寺周辺の無残な山腹崩落現場の現状には驚きと恐怖を感じ、沢谷地区への進入道路では孟宗竹が折れ、雨水を含んだ杉の小枝が散乱し行先を塞ぐ状態に、思わずハンドルを握る両手に力が入った。また、岩倉地区への県道木沢上那賀線では、あちこちで猿の大群と出合い、中には車の前を走る猿もいるなど野性獣の多いのには驚いた。そして、夜は夜で、宿泊先の主人から「大雨になると、隣の公民館に避難してもらいますよ。そのつもりで泊って下さい」と言われ、度胸のいる調査となった。幸い、台風は上陸せず、9・10日は曇りから晴れ、調査仲間も集まり、通常のフィールド調査となったが、斜面での実測や拓本には大地に足をふんばっての調査となった。ただ、一ヵ所は通行止で後日の調査となった。

今回の災害状況はテレビや新聞、木沢村からの現場写真等を見たり、記事を読んでの参加であったが、実際に現地を訪れ、山腹崩落の隣りでの調査、地元の人々の生々しい体験話、現実に民家の主屋と納屋が裂け、崩壊寸前で放置されている現場には恐怖心とともに緊張感を持ちながらの調査となった。

平成16年度の総合学術調査にあたっては、木沢村の中東利延村長様をはじめ、教育委員会や役場の関係機関、地元の有志の方々のご協力やご支援をいただき、10日間の調査となった。特に、山また山の山間集落や災害地での調査ということで、道に迷って目的地に着けなかったり、危険箇所を知らずに車を乗り入れたりの調査となったが、事故もなく、無事終了できたことは、現地の実情を適切にアドバイスをして下さった地元の人々のおかげと深く感謝している。また、木沢村は平成大合併に合わせて村誌編纂事業が進行中で、地元の人々も学術調査の発表資料集や研究紀要には多大な関心を寄せられている。そのことを念頭に置き、私達も村民の方々に参考になる報告書を作成することに努力をしている。

木沢村は昭和30年4月に村が誕生してから、50年間で幕を閉じ、平成17年3月1日に那賀郡丹生谷の木沢村、木頭村、上那賀町、鷲敷町の四町村が合併し、人口12,000人の「那賀町」として発足する。木沢村としての最後の総合学術調査となりましたが、今後、那賀町として発展することを期待しております。